

2010 年度特定共同研究申請書

1.応募領域（丸を付けてください） 古代史料領域 中世史料領域 <u>近世史料領域</u> 海外史料領域 複合史料領域
2.申請課題名 宗家史料の目録化
3.申請者 (所属部門・職名・氏名) 前近代日本史情報国際センター・近世史料部 教授 鶴田啓
4.所内共同研究者 (所属部門・職名・氏名) 近世史料部 助教 木村直樹
5.希望する研究期間 2010 年度～ 2012 年度 (3 年間)
6.課題の概要(400 字程度) (この項は広報等に利用・掲載することがあります) 旧対馬藩関係の史料（以下、宗家史料）は、現存する近世大名家史料群の中で優数の規模を持つ。また、数量だけではなく、藩庁と江戸藩邸双方の文書がまとまって残っていることや、日朝間の往復外交文書や外交折衝の記録が含まれているなど、他の大名家文書群には見られない特徴も有している。この史料群は、近代以降のさまざまな歴史的事情によって、現在では藩政時代のまとまりを一定程度残しながら複数の機関に所蔵されている。 本研究は、複数の機関に分散して所蔵される近世対馬藩の史料群を、学会共有の研究資源として横断的な利用を可能とするために、必要な研究を行うものである。
7.研究の目的(400 字程度) 本研究では、宗家史料について、一部未目録化部分（作業進行中）の目録化を推進するとともに、目録データフォーマットの違いを乗り越えて有効活用をはかるための研究を行うことを目的とする。 長崎県立対馬歴史民俗資料館（対馬市厳原）では、目録と史料の照合および入力作業が進行中であるが、同館は所蔵機関中最大の点数を有するだけでなく、藩庁で作成・保管された多彩な文書を所蔵している。そこでまず同館と緊密な連絡を取り、目録フォーマットについての考え方や検索システム設計におけるメタ・データのとり方に関して十分な討議を行う。その上で、他の史料所蔵機関にも呼びかけて、既存の目録やデータについてこうした点に関する相互認識を深める。

8. 共同利用・共同研究として進める意義と期待される研究成果(400 字程度)

機関ごとに目録作成やデータベース化が進んでいるとはいえ、各機関の方針、あるいは整理作業時の事情などにより、宗家史料の目録データのフォーマットは機関ごとにまちまちであり、藩政史料を一体のものとして参照・検索できる状態には至っていない。

目録データ自体を公開することで検索については検索エンジン利用に委ねる、というのも一つの考え方であろうが、それでは対馬藩が置かれていた近世の歴史的条件下で、宗家史料が本来持っていた構造や性格—文書が有機的に作成され、また保管・利用されていたこと—は十分に理解されないであろう。この点の解明をすすめ、上に述べたような現状を開く方法として、史料編纂所を初めとする各所蔵機関のメンバーを中心とした関係者による共同研究を行うことには意義があると考えます。

9. 研究の実施計画

2010 年度

研究打ち合わせ（東京・対馬）および実験システム（10.参照）の試用（東京・対馬）。とくに、冊子類の目録化について。

以下は、2011 年度以降の実施予定について記述するものである。

2011 年度

研究打ち合わせ（東京・対馬）および実験システム（10.参照）の試用（東京・対馬）。とくに、一紙物の目録化について。

2012 年度

研究打ち合わせ、研究成果のワークショップもしくはシンポジウムの開催（東京・対馬）。

10. 研究成果の公開計画

研究成果について、論文発表ないしインターネットを通じた公開を想定している。

また、対馬歴史民俗資料館でのデータ入力進行に合わせて、科学研究費（基盤研究(A)「日韓言語横断歴史資料検索システムの研究」研究代表者・鶴田啓、2007-2009 年度）で開発した横断検索実験システム（2009 年 12 月よりテスト中であり 2010 年 2 月稼働開始予定）へデータを移植し、宗家史料所蔵機関の指定した端末から検索利用できるようにすることも想定している。なお本格的な横断検索システムの構築のために、科学研究費（基盤研究(A)「宗家文書を素材とした分散所在大名家史料群の総合的研究」研究代表者・鶴田啓、2010-2013 年）を申請中である。

11. 共同研究員にもとめる役割

宗家を中心とする近世大名家史料を共同調査・研究し、同史料群の分類整理・構造把握を行なう。